

# 「情報 A」と「産業社会と人間」

## 「情報 A」と「産業社会と人間」の連携

茨城県立高萩清松高等学校 大和田 礼智

要旨 本校は、茨城県北部の高萩市にある創立 7 年目を迎えた総合学科の高校である。茨城県立松丘高等学校と茨城県立高萩工業高等学校が統合し、平成 18 年に茨城県内 6 番目の総合学科の高校としてスタートした。本校の情報科では、総合学科特有の科目である「産業社会と人間」と連携し、「産業社会と人間」で行った活動を情報科で報告書を作成するなどのフィードバックを行っている。これらの科目を学習し、即戦力として地域に貢献できる生徒の育成と、さらに専門性を高めるために大学進学を目指す生徒の育成に努めている。

### 1. はじめに

恥ずかしながら本校の生徒は、積極的に学習を進める生徒は少ない。今年 3 月の離任式で、校訓に「自ら学び」「自ら創り」「自ら拓く」と掲げているが、最も根本的なところである、「自ら学び」の部分が欠落している、この部分を何とかしてほしいと離任される教頭が嘆いたほどだ。各教科の先生方は、生徒の学力を伸ばすというところよりも「生徒をどう机に向かわせるか」ということを念頭において授業を進めている。

ちなみに多くの教科は授業初めに「誰でもできる単純作業」を生徒にやらせる強化が多く、国語科では漢字学習、我が情報科ではタイピングといった具合である。もっと正直に話せば、授業を取り組み以前に、教室に入る、椅子に座る、服装を正す、机の上、周りをきれいにし、教科書を出すことが必要なのだが・・・。

#### 1-1「能動的な」取り組みをさせるために

本校の情報科では、上記のように「生徒をどう机（情報科の場合はパソコン）に向かわせるか＝能動的な実習ができるか」を念頭に置き、授業を進めている。授業形態は実習が主なところなので、生徒の関心が低いと実習を進めることが出来なくなる。授業開始時から授業終了時までいかに生徒に興味を持ったままパソコンに向かい、課題を作成し、生徒に課題を作り終えた達成感と操作を覚えた充実感・優越感を味あわせるかが、生徒を実習に対して「能動的に」取り組ませるためのポイントとなる。

#### 1-2 大切な時期である「1 年次」

本校は総合学科である。1 年次に普通科と同じような履修内容、2 年次～3 年次からは 5 つの系列（人文科学系列、自然科学系列、機械テクノロジー系列、情報ビジネス系列、福祉・生活科学系列）に分かれて、それぞれの系列に所属し、その

系列の科目を履修することになる。

よって、1 年次の間に生徒は将来を考え、より進路に直結した系列に入ることになる。2 年次からの系列を選択するためには、1 年次の進路学習が非常に大切なものとなり、その進路学習は主に「産業社会と人間」で行われる。しかし、週 2 コマの「産業社会と人間」だけでは社会人講話や職場体験学習などを実施はできるが、そのあとのフィードバックする時間がなく、「やるだけやって中身が伴わない」という状況であった。そこで、パワーポイントを使いプレゼンテーションを行う情報科に白羽の矢がたち、「産業社会と人間」で実施した事を「情報 A」で感想・報告書作成・発表を行うことにより、進路学習をより充実した内容にすることを目指すことになった。

#### 1-3 プレゼンテーション能力＝？

「産業社会と人間」と連携することにより、「情報 A」でパワーポイントを使って発表を年間 3 度行うことになった。クラスの生徒の前での発表となり、情報科最初の授業で発表が年間 3 回あることを伝えると、誰もが嫌な顔をする。これはどの学校もそうだと思うが、生徒の中には小・中学校で発表を多くこなしていて、発表に慣れている生徒もいれば、人前に立つ機会が無く、人前で話すことに慣れてない生徒もいる。いざ発表を行ってみると、発表中に（また、発表が出来ずに）立ち尽くす、泣き出してしまう生徒もいた。しかし、年度初めに行う自己紹介、9 月の職場体験学習、年度末の「産業社会と人間」の 1 年間のまとめの発表と、年間通して 3 回の発表を行うことによって、プレゼンテーション能力の着実な向上を実感している。生徒は年間 3 度の発表を通し、人前・発表の場に立つ「場に慣れる」ことや、話し言葉ではなく、「発表をするのにふさわしい言葉づかいを身に付ける」ことを一人ひとりが意識し、また周りから指摘を受けることで、生徒はめきめきと

力をつけた。毎年のことだが、年度初めの自己紹介では、自分の名前も言えなかった生徒が、職場体験学習では、声は小さいが人前に立てるようになり、最後の産業社会と人間の1年間のまとめの発表では、堂々と発表ができる生徒が何人も出てくる。これは、我々教えている立場から見れば一番うれしいことだった。生徒は次から次へ発表スライドを作っていくうちに、「もっといい作品を作りたい」「次の発表はいつやるの?」と声上がる。「もっと分かりやすくみんなに伝えるためには」「もっときれいなスライドを作りたい」「アニメーションを極めたい」・・・と、生徒の目の色が変わってくる。こういう声があがっていく段階で、すでに生徒が能動的に実習を進めることが出来ていて、発表をすることについての自信が芽生えている。

私は、情報科の一教員として、生徒に「自分の考えを周りに積極的に伝える能力」を育てたいと思っている。それは言い換えれば、プレゼンテーション能力かもしれないが、私の中で生徒につけさせたい力をより具体化し、それを生徒に明確に伝えることによって、生徒は私の狙いを理解してくれるようになった。私は、「パワーポイント」という誰でも使えるソフトで、生徒が簡単に、きれいにスライドを作りあげ、明確で分かりやすい発表ができるようになることを目標としている。これが出来れば、生徒が社会に出てからも、一社会人として自分の伝えたいことを周りに明確に、分かりやすく伝えることができると考えている。

## 2. 職場体験学習

本校では9月の中旬に職場体験学習を行っている。体験先は介護施設、製造工場、美容室、消防署など多岐にわたり、毎年1年次で行きたい職場のアンケートを取り、その希望に合わせて生徒を各事業所に貼り付け、体験させることになる。期間はほとんどが2日間で、わずかではあるが、できるだけ職員が行っている作業を体験させてもらうように配慮していただきながら実施している。介護施設では、実際に利用者と触れ合ったり、工場では安全面を配慮して、単純かつ必要不可欠な作業に従事したりといった具合である。生徒からしてみれば、「もっと本格的な作業をしたかった」という声が出てくるが、一方で、職場の雰囲気、見えなかった部分が見えた、また、あいさつの大切さや報告・連絡・相談の重要性、言葉づかい・服装は正しくするべきなど、普段の学校生活では気づかない部分を知り、職場体験の中で身に付けることができた。毎年この経験をするすることで、普

段の学校で不十分だった部分を反省し改善する生徒が現れた。この経験と発見を情報科の授業の報告会の中で行うことで、生徒の中で「今後の学校でやるべきこと」をより明確なものにしていくのである。この点は、発表をする中で一番の狙いであり、身につけてほしい部分である。

### 2.1 1年間の締めくくりー全体発表会

「産業社会と人間」では職場体験や普通救命講習、奉仕作業や社会人講話などさまざまな活動を1年間のまとめのスライドとして作り、この1年を通して自分はどの系列に属し、どのような進路に進むかを発表する全体発表会を行っている。ここでの発表は未来の自分への道しるべを示した、いわゆるセルフ・プロモーション・プレゼンテーションとして位置付けている。各生徒はこの一年間の活動を通して、自分の適性や夢を見つけ、これから2・3年次でやるべきこと(学習する内容・身につけるべき資格・磨くべき人間性)をまとめ、周りに向けて、これからの将来歩むべき道を発表するのである。これはある意味、夢実現の為の決意表明である。この発表はクラス単位で行い、そのあとクラス代表を決め、後日全体での発表まで行う。全体発表では校長など管理職を始め、多くの方が視聴に訪れている。

### 2.2 今後の課題として

厳しい不況の現実を背景に、就職、進学ともに、今まで以上に進路実現がもてめられる。本校は約7割が就職希望を持つ現状を抱えながら、様々な志望進路に応える総合学科としての魅力を維持していくという学校運営が迫られている。限られた条件の中で、生徒のモチベーションを常に高めるために、本校の情報科でも上記に記したような取り組みを行ってきた。

今後の課題として、学校としての魅力と生徒の進路実現へのモチベーションを作り出し、教員集団が育てようとする生徒像を理解するために、情報科だけでなく学校全体の意思疎通をどのように図っていくか、という点が挙げられる。生徒の進路実現のためには、教員が同じ目標を持ち、生徒を指導していくことが何よりも重要である。

### 参考文献

- (1) 第16回全国高等学校総合学科教育研究大会(2011)
- (2) 第12回関東地区高等学校総合学科教育研究大会(2011)